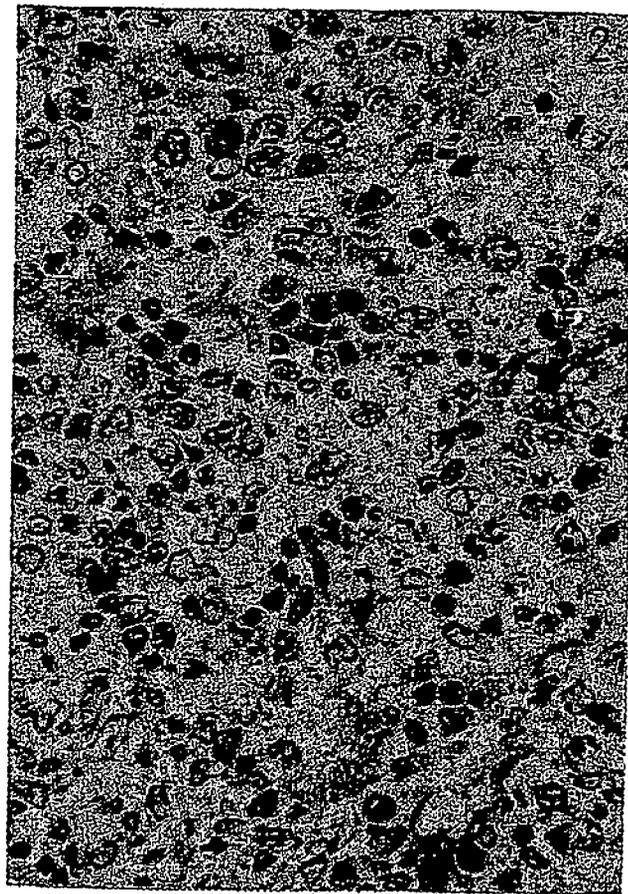
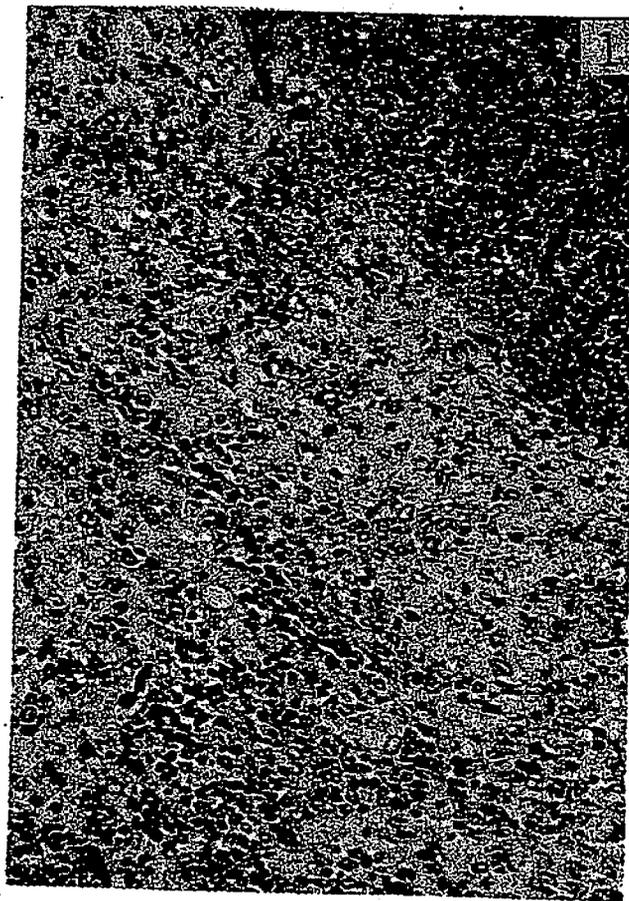


兎の肝臓における巣状壊死

家畜衛生試験場北海道支場 第14回獣医病理学研修会標本 No.210



標本：兎の肝臓

品種：エゾ野兎，性：不明，年齢：不明，飼育地：林業試験場北海道支場，産地：野幌自然林，固定：ホルマリン，染色：ヘマトキシリン・エオジン

臨床的事項：林試にて生態観察のため飼育中突然死亡。肝臓のみ持参。

肉眼的所見：肝実質は帯黄色で，粟粒大から米粒大の黄白色結節が密発していた。

組織学的所見：小葉の中心帯から中間帯にかけて壊死巣が多数分布し，偽好酸球を伴って固有の組織構造を留めるもの，あるいは融解壊死塊となってその週辺に間葉性細胞の分画帯を形成するものが認められた。分画組織は嗜銀線維増生を伴う組織球の増殖およびリンパ球系細胞と少数の偽好酸球浸潤で構成されていた(写真1)。これらは互いに融合し，大病巣に拡大しているものもあっ

て，切片のうえで種々の段階の壊死巣形成が認められた。さらに壊死巣の周辺部にはグラム陰性短桿菌の集塊が見された。壊死巣を囲む肝細胞は，核消失，空胞化，細胞限界不明瞭化などの類壊死像が強く認められた。肝類洞は拡張し，多量の組織球，好酸性顆粒をもつ骨髄性細胞，偽好酸球，および腫脹増殖した星細胞と血管内皮細胞などが充満し，さらに少数ながら赤芽球も散見された(写真2)。小葉間静脈には多量の大巣核細胞を容れ，管内皮下にも同様細胞が層をなしていた。所によって肝小葉内の壊死巣と連なる血管壁の壊死と，類線維素血栓形成があった。また，静脈周囲には著しい組織球系細胞の増殖が認められた。

組織学的診断：野兎病を疑うグラム陰性桿菌増殖と肉芽腫反応を伴う多発性巣状壊死。

写真1 H-E ×325 写真2 H-E ×520